

ピアニストの健康エッセイ・4

音楽という言葉

音楽をやっている人は国境を意識することがあまりありません。

たとえば2人以上が合奏するアンサンブルになれば、国籍の違う者同士と一緒に一つの音楽を作ることもあります。音を合わせる際には言葉でのやりとりもしますが、それが全てではありません。

以前私がオーストリアの国際音楽コンクールで伴奏の仕事をしていた時、ドイツ語はおろか英語も殆ど通じないバイオリニスト(ウクライナ出身)の女の子が来たことがありました。

お互い苦笑しながら片言の挨拶を済ませ、とにかく合わせてみましょう、と演奏し始めると・・・驚くほどぴったり合わせやすい！言葉が通じないので、彼女とは「そこはああしたい、こうしたい」という事前の打ち合わせが一切ないままでしたが、音で何を訴えたいのかその「気持ち」は痛いほど伝わり説得力があったのです。

音楽の中に強く明確な意思がある場合は、相手に伝わるエネルギーが非常に大きいことがあります。ピアノ伴奏者である私のみならず聴衆全員の心を驚づかみにし、その年は彼女が優勝しました。

ところで、言葉にならない様々な葛藤や内面の混乱を抱える人が、音楽や絵画に想いをぶつけていくうちに、次第に気持ちの整理がつき元気になるという心理療法があるそうです。

心の中にある様々な感情やイメージ、溜まった欲求を負のエネルギーにしないため、ということですが、もしかすると音楽家は常にそんなセラピーを自らに施しているのかもしれない。

そのせいか、繊細でありながらダメージを受けても復活するのが早い人が多い気がします。

また、言葉で上手く相手に伝えられずフラストレーションを溜めることは誰にでも多少はあることでしょう。そんな時に、自分の気持ちに沿った曲調の音楽(悲しい時には悲しい曲を、というように)から得られる共感、対人面でのストレスを取り除く力があります。

そういう意味では、日本の「カラオケ」文化はとても理にかなったストレス解消法だと思います。

さて、前述の国際音楽コンクールで、皆が感嘆した曲はブラームス作曲のハンガリー舞曲(全21曲、J・ヨアヒムによるバイオリンとピアノのための編曲版)です。バイオリンなどの弦楽器は人の声に近く、歌詞なき歌を聴かされているようで、わかりやすくダイレクトにハートに響いてきますのでお勧めです。ときには国境を越えた、言葉にならない心の叫びに揺さぶられてみませんか。きっと何か共鳴することでしょう。

丸山美由紀(ピアニスト・糸魚川市在住)

<http://miyukimaruyama.main.jp>